

第二期 第五十二号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020. 11. 20 定有堂書店 発行

本屋読書

「大都会」を離れて

「深い学び」をめぐる I

『「ビジネス書」と日本人』

プロボノ再開

「ドーナツの穴」はおいしい

忘れた頃のゲルニカ

入れときましょか

八代日記 (八)

ああ、うるわしいディスタンス

鳥取あれこれ その五十一

戦禍と楽人 (2)

クリームソーダ

拾うひと その二

奈良 敏行

三浦 永理

松田 裕史

三砂 慶明

芝野 浩貴

萩原 俊郎

吉田 海将

鳥居 貴彦

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

秦阜 梅林

あきの素生

ドラマリア

編集後記



本屋読書

奈良 敏行

(定有堂 店主)

鳥取県立図書館の開館三十周年記念のイベントがあった。十月十六日にはオンライン・シンポジウムがあり、「変化する時代の図書館の価値」と題する菅谷明子さんのお話を聞いた。

結論にダーウインの「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生きのびるのでもない。唯一生き残るのは変化できる者である」という教訓があった。物事には賞味期限があると理解した。同時に「イノベーション」にからめて一歩進んだ説明があったのだが、リモートのせいで聞き取れず、インタビュアーだった高橋司書にそんな話をしたところ、後日動画を巻き戻して調べてくださった。『イノベーションのジレンマ』(翔泳社)にもとづくお話だった。さっそく図書館で借りて読んだ。

実績ある優良企業が破壊的イノベーションに遭遇したとき、なすすべもなく崩壊するという摂理と、「変

化」の兆しは「内部」には存在しないという事例の本だった。優良であるが故に、顧客の求めを超えるサービスへと踏み外し、かえって顧客を失うという分析だ。そして外部にシンプルなサービスが生まれる。それが破壊的イノベーションの姿だ。

図書館という大きな世界のことには理解は及ばないが、本屋という小さな商いにも似たようなことはある。あるときある瞬間、ふと感じる、何かがこの店では終わっている。自分でもよく口癖のように「終わった」と語る。否定的な意味ではない。ほぼ完成し尽くしているが、何かが決定的に足りなく思える。商品構成や什器の配置など、いつか不可避的にそんな時が訪れる。積み重ねが「終わり」を準備する。積み重ねるのを止めればいい。一から始め直せばいい。そういう転位の訪れだろう。

シンポに刺激されて、変化すべく、二冊の本を平行して読んでいる。これからはデジタル時代だというのでオリジンをつかもうと『ネット興亡記』（日経新聞社）を手にする。もう一つは店頭でふと視線があつてしまった『街灯りとしての本屋』（雷鳥社）だ。11書店に聞くお店のはじめ方つづけ方、と副題にある。好きだから本屋をやる、を動機とする人たちだ。いまは国をあげてデジタル社会のとばくちに立っている。し

かし一方「終わり」のはじまりだともいえる。破壊的イノベーションはすでに「街灯り」としてはじまっている。違う成り立ち、違う生き方がそのイノベーションだ。好きだからやる、やりたいからつづけるだけ、自分のために灯しているだけだが、知らないうちに他人のためにも役立っていた。これが破壊的本屋イノベーションだと思う。扱う商品の多様化の先に未来はない。「本が好き」という原点に、破壊的イノベーションは宿ると予感する。

この本を教えてくれた高橋司書は、資料相談のカウンターで『ソトコト』十一月号も見せてくれた。表紙は「こども本の森 中之島」だった。こどもは未来をつくる破壊的イノベーションだ。そして未来をつくる本屋も特集されていた。偶然開いたところに、「音信不通」寄稿者の鳥居貴彦さんの本屋が、六頁にわたって紹介されていた。作り込むことの何一つない、正真正銘街灯りの本屋だ。

「終わった」と感じてもつづくのは、「ひと」という外部との出合いが途絶えないからだ。「終わり」のつづきがそこからはじまる。定有堂教室「読む会」のテキストは岩田直樹さんが選定されている。参加者にわかりやすいようにレジ前に並べる。読書会レベルの本なので定有堂の棚の本とは性格が違う。ふと別の世

界を感じ、ついでに一冊とお客さんが買っていく。定有堂の出口の印象を高めているのは間違いない。

2020.10.25

クレイトン・クリステンセン『イノベーションのジレンマ 増

補改訂版』翔泳社 2001

杉本貴司『ネット興亡記』日本経済新聞出版 2020

田中佳祐・竹田信弥『街灯りとしての本屋』雷鳥社 2019

『ソトコト』2020 11月号 株式会社RR

太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

■編集部からお知らせ



「音信不通」寄稿者の松田裕史さんが、「第69回読売教育賞」外国語・異文化部門で最優秀賞を受賞されました。教育分野で優れた実践をした個人や団体に贈られる賞です。

松田さんは、高校英語における「深い学び（ディープ・アクティブラーニング）」をテーマに、現場で日々研究と実践を重ねておられます。このたびは本当におめでとつございます。

ドラマメリア編集長記。

「大都会」を離れて

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

東京を離れて半年。東京に戻れなくなって半年。

思えば、私の短い人生の中で、東京にこれだけの期間いないことは初めてだ。大学時代、トルコに交換留学した際も、留学の半ばで帰京したし、それまでも毎年のように祖父母の家に帰省していた。今や、私にとって東京に帰ることは、不要不急なものになってしまっている。

正確には、私が「大都会」というものから距離をとっていることが人生で初めてなのかもしれない。

トルコに留学していた頃、過ごしていたのはイスタンブールであった。トルコ最大の都市で、アジアとヨーロッパの架け橋を自負する都市であり、その歴史は、ローマ帝国や古代ギリシャの時代にまで遡ることができる。当時はシリアからの難民が少しずつ目立ち始めている時期

であったから、正確な人口の把握が難しくなっていた。現在は、千五百万人以上の人口を有すると言われている。

そのような新興国の大都市であるから、交通整備は道半ばであった。とてもきれいに整備された道があるにもかかわらず、歩行者には優しくない。一本裏に入ると、交通量が多くとも、信号機がない道ばかりだ。

「You have to take your way in Istanbul.」(自分の道は自分で取らなきゃだめだよ。)

とルームシェア初日に言ってきたのはトルコ人のルームメイトだった。彼女の言ったことは確かで、私が住んだレヴェントの辺りは、ひっきりなしに車の往来があるのに、ほとんど信号機がなく、皆、車の間を縫うようにして歩いていた。駅からバスで帰ってくると、必ず家のほうに向かって道を渡らなくてはいけないので、日本の友人を招くときにはいつも頭を悩ませた。信号がなくて、大荷物を持った状態で、あの人たちは道を渡れるのだからか？

そんなカオスな状態が毎日だったおかげで、ヨーロッパ旅行をすると毎回安心して道を歩くことができた。なにせ、信号機があるのだから。

ただ、鳥取に来てしまうと、東京でも、私は「You have

to take your way.」とでもいうべき、歩き方をしていたと思う。

よく地方出身の友人に、「渋谷なんて行きたい方向に道を渡れない」と言われて、意味が分からないなどと思っていたが、今なら少し分かる。

ああいう街を歩くコツを、かつての私は自然と心得ていて、見たいものだけを、行きたい方向だけを見ていた。途中でティッシュ配りをする人や、ナンパしてくる人、正面からぶつかってきそうな人、全ては私の人生に関係のない背景のようなもので、私が考えるべきは、向かいたい方向のことだけだった。都会の人が冷たく、自己中心的に感じられるのは、そうでもしないと情報過多になって、何も手につかなくなるからかもしれない。

今、鳥取で過ごす私の目の前には、ぶつかってくる人などほとんどいないし、「〇〇駅で待ち合わせて、あそこに行くなら東口だろう」とか、考えることもあまりない。のんびりと歩くことができてしまう。

そんな風に考えると、都会の暮らしというのは、それぞれの人の闘争意識を常に喚起してくる装置のようだ。

道は勝手には開かず、しがみつくように探さなくてはならない。一步一步と歩くにも、強い目的意識が求めら

れる。そして、すれ違う人々の目と目、街頭広告から降り注ぐ目と目。誰かからの視線を常に感じ続け、「東京の人間」として振る舞い続けてしまう。そうでもないしと普通の生活ですら、都会ではままならない。

そして、鳥取に移ったとしても、私が生きているこの社会は、あの大都会に住んでいた頃と同じように、大勢の人間の視線が互いに注がれ、それぞれの生きる意味を行動で示せと圧力をかけてくるし、「You have to take your way.」と自らの手で道を切り開かねば進めない。そのことを私は忘れてしまったのだろうか？ この半年で。

この街で、私はゆっくりと夜空を見上げる。そうやってふらふら歩いていても邪魔してくるものはない。私は、空から降り注ぐ歴史の中でたったひとり、ひとりきりだと感じる。

かつてと同じようには歩けないと思いつながら、私は自分なりに歩けば良いのだということが、かすかな期待ではなく、確信に変わってきていると感じる。

自らの道は取るものだけでも、そこに通ずる歩き方は、常に私の前に開かれていたのだと。

「深い学び」をめぐる I

松田 裕史

(高校教員)

この春から夏にかけて、「深い学び」にフォーカスした授業実践を論文形式にまとめた。今年はコロナ禍で教育関係の多くの研究大会も中止を余儀なくされた。参加を予定していた研究大会が中止となったことも、人との接触が不要な論文投稿をするきっかけとなった。教職に就いている人であれば誰しも、学びの深さや授業の深さについて思い悩むことはあるだろう。私もその一人である。

深い学びを意識的に実践し始めたのはここ5～6年の間かもしれないが、論文に載せることにした実践はすべて昨年度以降のものであった。書いてみて初めて、自分の中で昨年度の4月頃を境にブレイクスルーが起こっていることに気づいた。論文のイントロではおおよそ次のようなことを書いた。

高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説の「外国語編 英語編」では「主体的・対話的で深い学び」の

実現に向けた授業改善の推進が謳われている。英語においてどのような学びが「主体的・対話的で深い学び」となるのだろうか？特に、「主体的・対話的」な学びの有り様はイメージしやすいが、英語においてどのような学びが「深い学び」となるのだろうか？

「深い学び」のキーとなる「外国語によるコミュニケーション」における見方・考え方は、「外国語で表現し伝え合うために、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに注目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に依拠して、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」とされている。前半部の「外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに注目して捉え」という部分はレッスンのテーマにかかわるものであり、教科書におけるすべてのレッスンが「外国語やその背景にある文化」を扱っているわけではない。そうだとすれば、「深い学び」においてより重要であるのは後半部の「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に依拠して、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると私は考える。さらに授業者が考えなければならぬのは、どのような場面設定が学びを深いものにするのか、どのような情報の整理の仕方や考えの再構築の方法が学びを深いものにするのかということである。

この「見方・考え方」に加え、私が「深い学び」を実践するにあたってその理論的基盤としたのは松下佳代(京都大学)の『ディープ・アクティブラーニング』である。(ディープ・アクティブラーニングについては『ディープ・アクティブラーニング』(勁草書房)や『深い学びを紡ぎだす』(勁草書房)に詳しい。)

『深い学びを紡ぎだす』では藤原頭によって次のように書かれている。「生活経験と接点のある教材で興味・関心を喚起しつつ、ペア／グループ活動を組織しながら、見通しを立て振り返りのある活動が位置づく授業をつくりさえすれば、学習者は学びの対象に必然的に深く迫っていけるわけではない」(藤原、2019、pp.119)

加えて、松下(2015)は深さの系譜を次の3つに整理している。すなわち、「深い学習」「深い理解」「深い関与」である。「深い学習」とは「単に教えられたことを暗記してはき出すだけでなく、推論や論証を行いながら意味を追求しているか」、「深い理解」とは「事実的知識や個別のスキルだけでなく、その背後にある概念や原理を理解しているか」、「深い関与」とは「いま学んでいる対象世界や学習活動に深く入り込んでいるか」という説明がなされている。

松下(2015)は特に「深い学習」と「深い理解」の2つが特に重要であると捉え、この2つをさらに体系化する

の手立てとしてマントルやエントウイスルを引用し、学びの深さを生み出すアプローチを紹介している。その中には「概念を既有的知識や経験に関連づける」「共通するパターンや根底にある原理を探す」「証拠をチェックし、結論と関係づける」「論理と議論を、周到かつ批判的に吟味する」「必要なら暗記学習を用いる」という5つのポイントがある。深い学びは授業者の思いつきだけでは継続して実現できないだろう。そこで私は、上記の深さの系譜や5つのポイントを意識的に基軸とした言語活動を2019年度から構想／実践することとした。

(参考文献)

グループ・ダイダクティカ編(2019)。「深い学びを紡ぎだす」：教科と子どもの視点から』勁草書房

松下佳代(2015)。「ディープ・アクティブラーニング』勁草書房

『「ビジネス書」と日本人』

三砂 慶明

(読書の学校)

本屋で働く役得の一つは、本を読んだ「後」があることとです。私は影響を受けやすい体質なので、読了後は大抵感動しています。読み終わった後、興奮が収まらない時は、「すごい本を見つけましたよ」と出版社の営業部に電話して、いかにこの本が素晴らしいか、についてお互いの意見を交換します。哀しいかな、大抵の場合、その本は品切重版未定で、お互いがっかりして受話器をおろすのですが、今回は少し様子が違いました。

いつもと同じようにPHP研究所に電話をして、ロマンスグレーのK様に、この本がなぜ素晴らしいのかをお伝えすると案の定、品切重版未定でしたが、「つなぎますよ」と返事が軽やかで、その場で予定が確定。なんとPHP研究所にお邪魔して、著者である川上恒雄先生のお話を直接拝聴できることになりました！

この本の素晴らしい点は、ビジネス書とはなんなのかを定義した上で、その本質をベストセラーから掘り下げていくことです。読んでいて私のスイッチが入ったのは、

たとえばこんな箇所です。

「「ビジネス書」とは必ずしもビジネスについての本ばかりではない。ビジネスに従事する主体としての自分自身がいかに人生を処すべきかという、人生指南の書を「ビジネス書」のコーナーにみかける読者も多いはずだ。現在では「自己啓発」とよばれているらしい。内容上からすると「人文書」のコーナーにあつてよいはずのものが、「ビジネス書」の棚に並んでいたりする。先に述べたように、「ビジネス書」のカテゴリーが、その内容よりもむしろ主な購入層―働く社会人―によって規定されているからだ。」

書店の中で、ビジネス書は、人文書と違って学問的に体系化されてはいないので、書店ごとにビジネス書のたずまいが違います。店舗ごとの独自性が色濃く反映されており、たとえば、丸善・丸の内本店のビジネス書ランキングはもはや別の国のニュースのようですし、コロナ禍で都市間の移動が抑制されるまでは、ブックエキスポレスやブックスタジオの新幹線改札内のビジネス書の売上は異次元でした。

私自身、ビジネス書を担当するようになり、考えさせられたのは、ビジネス書とは何なのか、です。

誤解をおそれずにいえば、つまるところ、ビジネス書とは、中身ではなく、購入者層である働く社会人の意識の反映です。とすれば、その時代の悩みであり、不安であり、技術についての本で、かつ革新的なものが、争って手にとられることになります。結果として時代の空気をとらえた本が、ベストセラーになるのは必然です。このベストセラーを因数分解して、本から時代を、時代から本へと還流しながら、らせん階段をのぼるようにビジネス書とは何なのかに迫っていく本書は、まさしく私が求めていた本だったのです。

カッパブックスと岩波新書の読み比べや、復刊した『ユダヤの商法』藤田田、松下幸之助やドラッカーなど、ビジネス書の一等星が燦然と輝く本書に、唯一の弱点をあげるとすれば、一番書店員として、知りたい「現代のビジネス書」についての展望が描かれていないことでした。

もう少し、具体的に内面を吐露すると、ベストセラーの方程式を読み解くことができれば、次のベストセラーが事前に予見できるようになります。恥ずかしい話、書店員として、そうなりたい、と思いました。思いのたけを川上先生に率直にお伝えすると、「やってみましょう」と心強いお返事をいただきました。

かくして、日本のビジネス書の起源から、高度経済成長期をへて、現代に至るベストセラーへの旅を全三回で、

NHK文化センター京都教室（11／30、1／28、3／25）にて開催させていただけることになりました！

第一回は、ビジネス書の起源と題して、スマイルズの『自助論』や福沢諭吉、新渡戸稲造といった日本に新しい風を吹き込んだ知識人を取り上げます。ビジネス書として取り上げられることの少ないオリソン・S・マーデンの知られざる系譜についても紹介します。

第二回は、日本のビジネス書ベストセラーランキング、不動の一位、松下幸之助やドラッカーなど、高度経済成長を軸にしたビジネス書の背景に迫ります。

最終回は、近代から現代までのビジネス書を読み継いできた中から、その軸となるものが何なのかについて読み解きます。はたして、この旅がどんな結末を迎えるかは出たとこ勝負ですが、是非ご期待ください。

【オンライン講座】「ビジネス書から見る日本社会」

講師・PHP研究所 理念経営研究センター首席研究員
川上恒雄 / 三砂慶明 申し込みページ：:

https://www.nhk-cul.co.jp/programs/progra_m_1215418.html

プロボノ再開

「忘れたあとに残るもの」

芝野 浩貴

(地球探家)

開けても地獄。閉めても地獄。命優先か、経済優先か。3月の沖縄以来プロボノは中止となり、約半年間、ほぼ県内に潜んでいたが、9月半ばようやく再開した。8月中旬に実施予定だったのを1ヶ月延長して、デニー知事の沖縄緊急事態宣言解除の言を受けての渡沖だった。

デヴィッド・グレイバーが亡くなった2週間後のことである。彼を追悼する時、マダガスカルで積み重ねたフィールドワークを想像してしまふ。舗装していない凸凹の道。魚を入れた籠を頭に歩く女性。川で遊ぶ少年と鉛筆を欲しがる少女。マダガスカルの風に吹かれて歩いていた時、お金や仕事や幸福ってなんなんだ? と感じたことを思い出した。沖縄が東京由来の感染爆発となり、内地から医療スタッフが支援に駆けつけていた。鳥取県も例外ではなく看護師が派遣されている。エッセンシャルワーカーの人達が気を休める時はない。それに対する報酬を論ずるのは野暮かもしれないが、ブルシット・ジョブほど報酬が高いことをグレイバーは指摘する。負債論もそうで

あるが、貨幣の意味を叩きつける。私達のプロボノはブルシット・ジョブではないと信じて行動している。私をプロボノへと誘う遊歴算家のS哲人は、10年連続で60回、延300時間気仙沼で講義をしている。気仙沼側から言わせると、3・11で学校も教科書も流されて、学ぶ場をなくすことの意味を感じたことからすれば、今はコロナよりも学びを優先する。だから、東京在住の講師だろうが招聘することと、夏も講義してきたと聞いた。冬も招聘されている。命優先か? 学び優先か? ではなく、〈命〉という学びを実践するプロボノである。

那覇に着くと、いきなりNさんの塾でお話し。

エッセンシャルワーカーの小中学生は塾のお金が免除されている。S哲人は、ニュートンがペスト期間に研究に没頭して万有引力の法則を発見したことを引き合いに、小さな塾内で相互触発することを説く。また、3・11後に、東大病院を辞めて福島に移住した若い医師が、何故日本トップの病院を辞めるのかと聞かれて、「こういう時のために、医師になったのです」と迷いなく行動したことを話し、学びの意味を揺さぶる。繰り返すが、対象は小中学生である。

今回の訪問学校は全て公立高校であった。コロナ禍でなくても学校外の人をどう受け入れるかはどの地域も慎重

であり、沖縄も例外でなく、公立からのオフアーはなく、沖縄でのプロボノの窓口は私学教育振興会だから、私学中心での活動が続いていた。コロナ禍での焦りや不安なのだろうか、はたまた数ヶ月後に迫りくる大学入学共通テストを意識されたのか、3日間で5高校を回ることもあった。何もないところからは何も生まれなく、急な企画が実現されたのは、ボトムアップでなく、元校長で現琉球大学で教鞭を取られるS地氏の各高校管理職との連携の中で速断即決のトップダウンだった。

初日：午前、新都心にある那覇国際高校(玄関には「10」と「00」の法則が揭示)で、「定義と定理の違い、定性的問題について」話し、レンタカーで読谷高校まで移動。読谷村は日本で一番人口の多い村である。ここは、沖縄戦で米軍が初上陸した場所である。石灰岩でできた岩は夏は涼しく冬は暖かいので村人の憩いの場であったが、集団自決をしてからは遺骨と位牌のある場所となつてしまった。3年前のチビリガマ荒らし事件を想いながら、生徒の前に立つ。

S哲人のメッセージは、「批判的精神(疑う力)と体制順応力のバランスを整える学びをめざせ！」

2日目：午前首里高校にて、「感染症モデル、ベイズ推定、和分・差分」について話し、コロナ禍における数学を紹介して、午後は那覇西高校へ。PCR検査に関する共通テスト用模擬問題1問を事前に解いてもらう。図書館が会場で司書さんとも談笑。首里も那覇西も校長が数学の先生で数学談議もできたが、那覇西の英語と体育の両教頭が教育熱心で、再会を約束。

3日目：生徒想いの熱心なO城進路部長の誘いで宜野湾高校へ。S哲人は誤謬の研究、私は身近な数学について話す。定期試験が終わった日だけに、100分集中力を切らさずに聞き続ける生徒に感心した。その後、今回の仕掛け人のS地先生車で普天間高校や開邦高校を回り、次の地へ移動した。

今回の講義では、S哲人はどこでも、アインシュタインの「教育とは、学校で習ったことをすべて忘れた後に残っているものである」という言葉を引用して暗記学習を戒めていたが、教室の後ろで聴講されていた先生方(各学校とも10名前後参加)にも響いたことだろう。

三島由紀夫自決から50年後の今、へブルシット・ジョブについて考える時でもある。

「ドーナツの穴」はおいしい

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

戸籍を移すために久しぶりに岡山に帰った。就職で鳥取に移り住み、結婚して家庭をつくり、還暦も過ぎた今になって転籍しようと思いついたのは、戸籍謄本が必要になるたびに老齢になったおふくろに市役所まで出向いてもらおうのが気の毒になったからだ。

実家のある辺りは、市中中が焼け野が原になった岡山大空襲でB-29がここだけ爆弾を落とさないうでくれたおかげで、昭和のはじめの面影を色濃く残している。

家は昭和9年の室戸台風で市内が水浸しとなった直後に建てられ(岡山はそれ以後、災害に無縁)、おふくろと同年齢の築86年。西洋風のベランダと茶室を併せ持つ、当時の中産階級が好んだ「和洋折衷の住宅」である。

旭川沿いを散歩すれば後楽園、天満屋のある古い商店街や県立美術館、シンフォニーホールも歩いてすぐ、と

いう便利な立地にある。

ところが私が大学進学で岡山を離れた頃から、雲行きが怪しくなってきた。

若い世代は郊外の住宅団地に家を買ひ、次々出て行った。子供の声が消え、歩いているのはお年寄りばかり。駄菓子屋、文房具店、本屋がなくなつた。いわゆる「都市の空洞化」「ドーナツ化現象」というやつだ。やがて母校の小学校、中学校も児童生徒が激減して村の分校のような有様になり、中心部の小学校4校、中学2校が廃校、代わりに見知らぬ名前の小中学校が母校跡地に建つた。

まあ、「都市のドーナツ化」は全国いたる所で起きている。寂しくはあつたが、これも時代の流れ、とあきらめていた。

しかし、世の中なにか起きるか分からない。「異変」に気づいたのは十数年ほど前。実家に帰るたびに、子供の遊ぶ声が聞こえるようになった。

もともと戦前の古い家が密集していて、マンションを建てるまとまった用地もなく、家主が亡くなつたり施設に入った家から、1軒の跡地にマツチ箱のような小さな建売住宅が4軒建つ、といった具合に「住宅ラッシュ」が始まったようなのである。

「子育てするなら『文教地区』の中心部に、というのが今どきの流れらしいんよ」とおふくろが解説。驚くことに統合された小学校（屋内プール・運動場がある、すごい校舎）は満杯となり、統合で消えた小学校が近く復活するという。わが家と同じくらい古い隣家は今年、「孫を通わせたい」と三階建ての三世代住宅に建て替えた。

他人事と思っていたら、その波はわが身にも及んできた。おふくろにはかねがね「岡山の家にはもう帰らないから、処分して介護付きマンションを買えばいい」と話していたが、倉敷の郊外に家を建てたはずの妹が「だったら私がリフォームして住むから、ちようだい」と、ちゃっかり割り込んできた。

聞けば「ここは車がなくても暮らせるし、静かで便利だから。その代わり、お母さんの面倒は私たちが見る」。妹夫婦は病院勤務なので、なんの文句もない。

今や子育て世代だけでなく、シニア世代にも「ドーナツの穴はおいしい」らしいのだ。その代わり、かつて人氣だった郊外の住宅団地は高齢化が進み、バス路線やスーパーが消えて荒廃が一気に進んでいる。

ひるがえって山陰はどうか。残念ながら郊外を含む人口全体が減少しているので、岡山のような逆ターン現象

象は限定的では、というのが私の印象だ。

倉吉は今、空洞を観光地区で穴埋めしようとしている。鳥取はかつて『デフレの正体』で知られる藻谷浩介さんが「人口が将来減るのに、湖山や津ノ井まで拠点市街地を広げ、環状道路でつなげよう、などという時代錯誤の為政者の失政で二重に苦しんでいる」と喝破していた。

その鳥取で今、中心部にある市役所の跡地活用が取りざたされている。地元紙は「NHK鳥取放送局が移転構想」とやや「飛ばし」の記事を載せたが、「そうか、その手があった!」と思わず手を打った。

岡山のNHKは岡山駅西口に市ミュージアムや全日空ホテルとの合築で移転した。駅とは連絡橋でつながって便利だ。大阪も市歴史博物館やホールとの合築方式。交流・情報拠点となり、財政負担もNHKと分散できる。

にもかかわらず、活用を話し合う経済・文化団体の会合は「暫定的にイベントなどに活用できる多機能広場に整備する案への賛意が出席者の過半数を占めた」（地元紙）。

どこまでもオカミ頼み、外の動きも知らぬ。ああ、これだから鳥取は!

忘れた頃のゲルニカ

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

人類史上初めての無差別爆撃で焼け残った、ゲルニカの街を象徴する木。そこにピカソの絵画「ゲルニカ」の中央下部にある、倒れた兵士の脇に咲く小さな花が、重ねられるように映し出された。

9月下旬、渋谷・パルコ劇場で上演された「ゲルニカ」の終盤的一幕だ。長田育恵の新作で、演出は栗山民也。公演を知った時点でチケットは売り切れていた。が、コロナ禍の観客制限の緩和に伴い、追加販売で運良く手に入れることができた。

舞台にほとんど興味が無い私だが、井上ひさしの作品を多く手がけてきた栗山がゲルニカをテーマにしたところが、わざわざ出かけて見てみよう、という決め手になった。ピカソの絵を見たときの衝動が、創作のきっかけになったという。

絵画にもほとんど興味が無い私が、ゲルニカに興味を

持ったのは、大学生の頃だった。教育学を専攻していたのだが、美術教育に詳しい友人から、ある教師の実践を紹介した本を紹介された。今も書棚のどこかにあるはずだが、ゲルニカを題材とした授業で、兵士の近くに咲く花にフォーカスをしていた。花は「アネモネ」で、その花言葉から、希望や再生を意味しているのだろう、という解釈だった。残酷な絵の片隅に、こんな仕掛けがあるのかと驚き、すぐに購入した複製画は、今も千葉の実家の玄関に飾られている。

7年間の学生生活、2年間のフリーター生活をへて、2003年に新聞社に入った私は、入社1年後に当時のデスクから、小学校で一緒に授業をしよう、とお誘いを受けた。広島出身のデスクは、原爆投下直後の惨状を目の当たりにした祖父母から聞いた話をしたのに対し、私はなんとゲルニカを題材にしている。普通は取材体験を話すのだろうが、1年間の取材の中では、子どもたちの前で話すことが見つからず、恥ずかしい限りだ。04年3月5日の奈良版に、この様子を紹介した短行の記事が掲載され、私は「悲惨な戦争を乗り越えて、今の平和があることを学んでほしい」と宣っている。

次のゲルニカは本物だ。13年と17年、スペイン・リーガエスパニョーラにメッシを子どもと一緒に見に行ったついでだった。マドリッド・ソフィア王妃芸術センターが

無料公開される日時に合わせれば、誰でも気軽に見られるようになっていた。帰国後、同じ中学校に通った長男、次男は、美術で課せられた名作のスケッチのテーマにゲルニカを選んだ。

そろそろ芝居に戻ろう。劇中にピカソは登場しない。空爆の日が迫る中、街に愛着を持ち生きる人々の日常が主な舞台だ。主演の上白石萌歌は、由緒ある領主の娘。不自由のない生活を送っていたが、フランコ將軍のクーデターによる内戦のさなか、出生の秘密を知り、家を飛び出して新体制派の人たちと共に生きることを選ぶ。一方、キムラ緑子演じる「母」は、自らの感情や欲望に翻弄され、ついにはドイツ軍に街の空爆を許可してしまう。娘を失い、破滅の道を転げ落ちていく演技力が際立つ。

長田は作秋に現地を訪れた際、議事堂前に立つ、バスクの自治を象徴する4代目の「ゲルニカの木」から脚本の着想を得たという。パンフレットで長田は、爆撃の悲惨さだけでなく「未来につながる希望と視線を込めた」と語る。「ゲルニカの悲劇は何度でも起こり得る、だから今日もそれに抗うためのプロセスを続けなくてはならない」という。コロナ禍のもと執筆中に、国の対応などに違和感を感じたこともあったというが、「この作品を、今私が生きる日本と地続きな物語として書くことが出来ました」と振り返る。

危機の中で、どう振る舞い、日常を生きるのか。この芝居

やピカソの絵は問うている。

◇

コロナ禍の行く末を気にしつつも、「Go To キャンペーン」を利用して、今まで行く機会が無かった場所を訪れたいと考えている。十月下旬には、北海道で運良く、たくさんのサケの遡上を目の当たりにした。十一月には長崎を予定している。この原稿を書いている最中に、ゲルニカ空爆のがれきから発見された、頭だけのマリア像の複製が、浦上天主堂にあることを知った。長崎の被爆七十年の年に、現地の司祭らから贈られたものだという。

入れときまじよか

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

保育園に子どもを送っていった帰り道、パン屋に寄ると厨房で親父が怒られていた。「あんたそんなしてなんもせんと座ってるだけなんやったら植木に水でもやってよ！」と早口で鋭い声。「ああ、忘れてた。へへへ」と言いながら奥から親父が出てくる。鋭い声の主はこちらを向き「袋はお持ちですか」と柔らかい声で聞く。リュックから出てきた汚い布袋を「拝借いたします」と手に取りあんパンとメロンパンとカレーパンを入れる。拝借されるほどいいものではないぞ、と思いながら店を出ると親父が植木に水をやっていた。

「袋いりません」と言われることが増えた。というかほとんどの人が裸のまま本を持って帰る。ありがとうございます。でもリュックにギュツと入る雑誌は窮屈そう。大きすぎるエコバックに入れられた文庫本の冊はなんだ

か居心地が悪そうだし、自転車のカゴにそのまま入れられたマンガは今ごろどこか道端におとされているんじゃないか。汚い布袋から出てくるパンは汚い布袋から出てきたパンの味がする。ただいいればいいのか、持って帰れたらいいのか。包まれている安心感が失われた世界。それがいいとか悪いとかはわからない。みんな工夫して生きている。

「本、引き取ってくれへんかな」とおじさんがやってきた。「前にタクシーでここ通ってね。どこに頼んでもいいんやけどまあわかるとこに聞いてみよかなと思つて」と言つておじさんは帰つていった。引き取りの数日前、おじさんから電話。「あのね、ゴミ屋敷なんですわ。びっくりせんといつて」それだけ行つて電話は切れた。ぼくの中で何かがしぼみ、べつの何かが高まる。家につくと、聞いた通りの景色だった。門をくぐつた瞬間に何かが靴底で音を立てる。「ここにこんだけと、あと二階と、一階にもちよつとある」というおじさんの説明を聞きながら玄関のドアに挟まっていた古紙回収業者のチラシをそつと抜き取つてポケットに入れておく。二階の廊下は雪が降り積もつた日の朝のよう。点々と続く自分の足跡。その先にある黒い本たち。白くなるかもしれない本と、白

くなるかもしれないけれどその手間をかけていいのかわからない本たちと、もう黒いままであろう本たち。箱に入れたり、紐でしばったり、ビニール袋にほりこんだり。「うまいことするなあ」とおじさんがつぶやいた。

さこうさんがよいしょと木箱を持ち上げる。一個二個三個。六個目でバキと軽快な音を立てて潰れた。さらさらと本が流れ出す。あああ、としかいえないこういう時。木箱は便利。横にして積み本棚にもなるし頑丈やし。ただ運ぶには心許ない。潰れたらもう何もいえない。ダンボールはすごい発明ですね。紙で本が運べるなんて誰が想像しただろう。ただ、書籍の流通で使われてるダンボールは本当に薄っぺらい。お金かけてられないんです、と誰かが言っていた気がするが本当だろうか。もつとも頑丈なのは八百屋に行けばある。バナナの箱。硬いしでかい。海を越えてきたという貫禄を感じる。ただ、でかすぎて本をいっばいに詰め込むと大変。あとなぜか底に穴が開いていることが多い。リングの箱は硬くて頑丈、ほどよい大きさ。みかん箱は少し小ぶりだけど重くなりすぎないのでよい。欠点はどちらもでかいホッチキスで封されていること。外すのが面倒でたたもうという気持ちはなくなる。保管しておくのに場所をとる。折りたた

まないダンボールの機能の8割を損している気持ちになりませんか。こないだ「ファミチキのダンボールは文庫本を入れるのにちょうどよい」という知識を得たのがどこに行けばファミチキのダンボールが手に入るのかわからない。10個くらい買えばもらえるのだろうか。

最近、出版社から直送されてくる荷物が再利用のダンボールでやってくるが増えた気がする。コピー用紙とかなんかのロゴが入っている。以前は新品だったりその会社のロゴが入ってたりしてたんやけどなあ。気のせいでしょうか。別に再利用でも全く構わないしその方が面白いんですけどね。

送られてくるといえば、たまにポストに入っている不在票。ゆうパックとヤマトは安定感ある。佐川のはお？つてなるし、福山通運とエコ配はドキドキするね。不在票の佇まいの話です。配達の方はみなさんもれなく親切です。いつもありがとうございます。

八代日記 (八)

齊藤 仁昭

(元長崎書店勤務)

十月某日

配達のものち、長崎次郎書店に立ち寄る。児童書コーナーにて「日本の昔話と民話」フェアが開催されていた。すごいいいフェアですねと担当に伝えたが、「みんな怖いって言つて、あんまり近づいてくれないんです。」とのこと。そうかそうなのか。昔話はいんまり興味を持たれないのだろうか。

フェアについて、店のインスタグラムへの投稿文が素敵だったので引用させていただきます。『日本の昔話には、動物や自然がよく出てきます。どうしようもない人間もたくさん登場します。それは、日本の昔話には、農民の生活や信仰や人間関係が色濃く反映されているからだと思います。昔話はこわいという話もよく耳にしますが、だからと言って敬遠する前に、その理由を考えてみませんか。こわいお話だって、どうしようもないお話だって、大切にされてきた理由があるはずです。』

『どうしようもない』というワードが2回も出てくるところに救いを求めていたのが私だろう。

八代関係ということで『寺村輝夫のどんち話 彦一さん』（あかね書房）を購入（1976年12月初版で、2017年6月で70刷。すごい）。ヒサクニヒコの絵が良い。長崎次郎書店のロングセラーは『日本の民話 27 肥後の民話』（荒木精之編、未来社）です。おすすめです。

自分の担当を引き継いでくれたKさんが品出しをしていたので挨拶。棚も私のときより数段よくなつていて、うれしくなった。昨日分の売り上げスリップを見せてもらい、ふむふむと言ってみる。スリップを見るのはやっぱり楽しい。今もスリッププレス化は進行しているのかは聞きそびれた。

早くもホームシックで、長崎次郎書店のある町（熊本市中心区新町）に住みたいが、通勤が片道1時間以上かかる。悩む。今住んでいるところには帰りに立ち読みしに寄りたい書店がない。新町に住んだら新町日記になるな、いいな。新町って、定有堂のある街の隣町も同じ名前じゃなかったでしたか。ニュータウン。

十月某日

祖母の一周忌。コロナ禍なので参列者は少なめで行う。

久しぶりに昼から飲めることを不謹慎にも喜んでいたのだけれど、もうすっかり酒に弱くなってしまったようで、そこそこでおしまいにした。おばあちゃん、5月にひ孫がひとり増えました。

八代に越した3月あたりから、外にも全く飲みに行っていないし、飲む機会が減って酒に弱くなった人はたくさんいるんじゃないだろうか。でも家で酒量が増えちゃった人もいるのか。私は家で飲むと寂しくなるのでほとんど家では飲まない。そういえば9月の健康診断の結果はすべてAだった。豚骨ラーメンも缶コーヒーも結局やめることができていないのだが。

十月某日

『ビールでブルックリンを変えた男 ブルックリン・ブルワリー起業物語』（ステイブ・ヒンディ著、和田侑子訳、DU BOOKS）を読む。巻頭に引用されていたベンジャミン・フランクリンの言葉にまず感銘を受けてその余韻で読む。B6変型判の書籍のサイズ感や使われている紙の質感も良かった。インディペンデントでありながら、コミュニティにも貢献できる商売についての良いテキスト。

十月某日

例年11月に行われる九州三大祭のひとつ、八代の妙見祭（みようけんさい）も今年では中止だそうだ（神事のみ開催）。10月の花火大会も中止。また、八代市はクルーズ船用の岸壁を備えた「くまもんポート八代」を今年から運用するはずだったがそちらも現在は停止中。現状、観光客を見かけることはほとんどない。菓子屋にもやはり影響は及んでおり、なかなか難しいところである。

十月某日

ケバブジョンソン東京サイドではレコーディングが進んでいるようで、次のアルバムの目途が付きそうだ。次でアルバムは5枚目。ビートルズだと『Help!』かな。おこがましくもそう考えると、ぜんぜん初期なのか。まだまだロングアンドワインディングロードつてことで50歳までは楽しみたい。とか言うのがとてもおじさん臭いのもう引退したほうがいいのかもしれない。いやしない。

Taylor Deupree の新譜が良かった。ライブで聴きたいがしばらくそういうのは観れないのだろうか。

ああ、うるわしいディスプレイ

ムラカミヒロミ

(フライングブックマン)

毎年恒例の「神田古本まつり」が中止になった。

緊急事態宣言下、各種古書展が軒並み中止、店売は自粛、市会も疎に開けない状況が続いていたのが、漸く旧に復しつつある矢先である。まあ、毎年の人出を考えれば、止むを得ない判断ではあろう。それでなくとも、再燃が心配されているこの頃であれば。

四月の東京都のお達しでは、営業自粛は「本屋（新刊書店）は対象外で、古本屋は対象内」ということであった。東京都の自粛要請対象施設一覧は、こうである。

古本屋は「基本的に休止を要請する施設」で、本屋は「社会生活を維持するうえで必要な施設」として対象外となっている。

もつとも、古本屋も、床面積一千平米超が対象であつて、百一平米以上、一千平米以下が「協力を要請」、百平米以下は、適切な措置の上、営業可とある。

うーむ、どれほど古本屋の実態をご存じの上でお決めになったのか…。

なるほど、古本屋の多くは間口二間ほどで、店内は汗牛充棟、混沌としていて、客同士がすれ違うのも遠慮しいしいの狭さである。入口に消毒液を置くのは可能としても、レジ前で二メートルの間隔を空けたら、三人目は店の外に出てしまう。おお、何とうるわしきディスプレイス。

そもそも、有名店と言えども、店舗はびっくりするほど小さく、独立したビルの店など数える程しかない。一千平米超の古本屋なんてあるものか。あるとすれば、倉庫を兼ねるタイプの新古書店くらいだろう。古本屋の主役は、あくまでも本であつて、客の居場所などは殆ど埒外である。居心地を良くすれば、立ち読みが増え、商品が傷むじゃないか。

最たるものは、古書展、古書市であつて、これはもう万魔殿（パンデモニウム）としか言いようがない。狭いフロアに、古書が、これでもかとはかりに積み詰め込まれ敷き詰められ、些かの隙間もない。ただでさえ病気になるような古本の匂いに加え、蟻集する老人たちの、

お世辞にも爽やかとは言いがブレンドされ、あまつさえ換気など、どこの世界の話かというような環境である。若い（いや、若くなくても）女性など、とても一人で入れたものではない恐怖と戦慄の世界である。鼻炎の方も遠慮されたがよろしい。これは確かに、自粛しなければ仕方がない。

古本屋は、昔から通販はお家芸としたもので、今はインターネット販売やネット・オークションを併用している店も多いから、売る方は何とかなるとしても、何ともならないのが市からの仕入れや客買いだと聞く。成程、いくら売れても、兵站が確保されなければ奈翁でさえ大敗する。

それにしても、新刊書店が社会生活上不可欠という認識に異存はないものの、町中の商店街の中小書店など、規模的に見て古本屋と、どれ程の違いがあるとも思えない。

むしろ、ターミナル駅付近の大書店の方が、夕方や休日の集密度は大きい筈で、それかあらぬか、要請は無いにもかかわらず、早々に休業した所が多い。

まあ、付度するに、新刊は時事喫緊のものが多く、知

る権利の保障に関わる。就中、新聞社系、週刊誌系の出版物も少なくなない、という事情が大いに影響しているのであろう（独禁法の除外規定と通底する）。一方、古本は過去の遺物（ちよつと言ひ過ぎ）で、緊急性は極めて低く、ヒモも付いていないという判断があっても不思議はない。大抵の女性なら、「古本なんて、ただの汚いゴミじゃないの」と考えるだろうし（小池さんがそう仰った訳ではありません。言い兼ねないとは思うけど）。

とまれ、この一年、本屋も出版社も流通業界も大変なことになってしまった。旧態依然としたシステムの中で、綱渡りのに、無理に無理を重ねてやって来たツケが一気に襲ってきた、という印象もある。今後、劇的な変化と再編に向かって、雪崩を打って突き進んで行くような気がしてならない。

ネット書店の一人勝ちか、電子書籍の一举普及か、町の本屋さんも、一介の読者も、これからどんな「すばらしき新世界」がやって来るのか、戦々兢兢々の日々である。

（表題は、吉田一穂の詩句による。現代風の表記に改めたことをお断りしておく。）

鳥取あれこれ

その五十一

内田 克彦 (地域研究家)

二〇一一年夏に、新藤兼人著のガリ版刷りの脚本『砂丘の蔭に』が見つかったとの新聞記事が、脚本を手にした田中勢一郎さんの写真と併せて載った。七月二七日付けの『日本海新聞』では、「映画化は難しい状況に追い込まれ、1年後にも『天使の顔』と改題して映像化を進めたが結局は実現しなかった」とあり、八月一日付けの『讀賣新聞』では、「新藤監督は、「田中」新次郎さんの自宅などに泊まり込み、約3か月にわたって吉田さんらに密着取材したという。脚本は完成後、「お世話になったお礼に」と田中家に郵送されてきた。(略) その後も『天使の顔』と改題して撮影準備が進められたが、実現しなかった」とあった。(なお、田中さん自身が、同様のことを、二〇一五年発刊の『鳥取民俗懇話会会報第10号』で記述されている。)

『天使の顔』について、新藤兼人著『作劇術』には、次の記述がある。

新興キネマのプロデューサーが島根県の人〔筆者注 鳥取県の誤りで、鳥取市出身の岡田勲のこと〕で、モデルになった主人公の保健婦のことを知っていたんです。その企画のために取材しているところで、映画会社合併の話が出て、それきりになってしまった。それを、あとで書いたんです。

『天使の顔』は、雑誌『日本映畫』の一九四二年五月号〔筆者注 未見である〕に掲載された後、情報局による第一回公募の「国民映畫脚本」に佳作となり、東亜書林から一九四二年九月発刊の『國民映畫脚本集(第一回募集)』に収録されている。このたび幸いにも、田中さんからガリ版刷りの『砂丘の蔭に』をお借りすることができ、『天使の顔』との違いを確かめてみることにした。

主人公の名前は「葉山菊代」で同じである。また『砂丘の蔭に』では、「字幕 昭和×年×月。我國最初の保健訪問婦が、鳥取県稲葉産業組合に生れた。」と始まるところを、『天使の顔』では、「場所。山陰道縣廳の在るT市(まち)と、市(まち)をめぐる農山漁村を中心。」とし、「今町五番地と呼ばれる貧民街」の場所を「古町五番地」と、「鳥取高農前の妊婦の家」を「出征兵を夫に持つ妊婦の家」とするなど具体的な地名をやめ

たり、最新の社会状況に変えたりして記述している。

とはいえ、内容については、脚本と併せて田中さんからお借りした、一九四二年五月四日付けの田中新次郎宛の葉書に、新藤兼人自らが、『日本映畫』五月号に載せた『天使の顔』と『砂丘の蔭に』と余り大差なく、あれを、今日的に直したやうなものです」と書くように、ほぼ同じで大きな修正はなかった。

ところが、驚くことに、吉田喜久代の娘である澤田和可世さんの所に、「吉田様」と表書きしてある、これもガリ版刷りの『砂丘の蔭に』の脚本が保存されていることを、吉田喜久代の研究が続けている佐々木美幸さんから教えて頂いた。その脚本は、吉田喜久代本人の仕事振りをそのままドキュメンタリータッチで追っていくものであった。澤田さん所蔵の『砂丘の蔭に』（四〇頁）と田中さん所蔵の『砂丘の蔭に』（一三二頁）と二種類の脚本があることになるが、その経緯がよく分からない。

吉田喜久代著『砂丘の蔭に』が長崎書店から発刊されたのが、一九四〇年九月である。同年一月五日付けの『日本海新聞』には、早速次の記事が載る。

映畫製作は今冬から櫻花の春にかけ鳥取市に於て新

進監督深田修三氏、主演逢初夢子が彼女に扮してロケーションを行ふ手筈となつたもので（略）打合せのため新興映畫会社岡田製作部長、新藤企画部長天辰副監督の一行は三日來鳥四日は市産業課について觀光方面の見聞を行つたが鳥取市におけるロケは雪の二月約四十名の男女俳優が來鳥し明春櫻季節まで撮影をつづける筈である

さらに、翌年の五月一七日付けでは、「『砂丘の蔭に』近く文化映畫製作」の見出しで次の記述がある。（但し、これ以降の映画化関連の新聞記事は見当たらない。）

新興文化映畫部では今回厚生省農林省農山漁村文化協會等の後援を得て鳥取の風光を背景に、吉田喜久代女史の保健訪問日記『砂丘の蔭に』を文化映畫として撮影すべく本月二十日過ぎより約一ヶ月間に亘り本市に撮影隊を派遣することになった

最初の記事には「男女俳優が來鳥」とあるが、二番目の記事には「撮影隊を派遣」とあり、扱いが異なっている。

（以下、続く）

二〇二〇・一〇・二二

戦禍と楽人 (2) 修士(マギスター) Hの場合

武中淳彦(秦阜梅林 本名)

(楽人)

I ブルックナー・シューレ(派)

同門同郷のAブルックナーを誰よりも敬愛してゐた師は生活||信仰||芸術||賛美、全て神の與え給うものと云う敬虔さの中、自由や自然、愛とか、そう云つたものと同じ位上位に酒も在つたようで、神のようなブルックナーの愛した酒に親しみ何の科在ろう事か? こう云つて憚らずほろ酔いの時、必ず彼の何番かの交響曲を突然ピアノで弾きはじめ歌い乍らご機嫌な講釈を始める。此れは学内でもつとに有名で学生達はピアノを囲む輪から一人亦一人と徐々に消えてゆくのが常だつたけれど僕には「堪えられない時間」だつた:

○番アダージョ、△番スケルツォ、●番フィナーレのドッペルフーゲ(ガ):しまいには僕だけが残つてピアノの低い所、バスを重ねたり。

タタタッタ、タタタッタ! 酔つ払つて蹠踉乍ら踏むステップの鈍重さがスケルツォの泥臭さにピツタリ! 心地良かった、國民樂派的ローカル芸術の粹。

II 卍?

其れより何しろ此の御仁、大変な酒好き、殆ど酒乱に近くいつも紅い顔してゐて講義が朝から始まる時もだつた。尤も喫には深酒カトリック信徒の伝統? さえあつて挙つて葡萄酒醸造や販売に精を出しブランド銘柄も多く「葡萄酒無くして有難い聖餐式もありやしないだろう!」: 完全に開き直つてゐた。

或る日、二人きりで若い日のエピソードを訊いてゐる最中、僕は煥然と、かなり挑発的に: そして珍しく

大声で訊いた「師匠、師匠は、ゼンたい戦時下ナチ！ だつたんですか？」…師は目を丸くして此方をじつと見据えて静かに「君のお父さん、兵役は？」と。「、36年頃生まれ。ごく子どもだったんでお爺さん達です、兵役に就いたのは。…2人共将校でしたね」師曰く「其れと同じだよ、東條將軍がファシストだったから殆どの日本の兵達もそうだった？」すかさず「違います」と僕：やや間を置いて師。「だろ？…？」

Ⅲ ラッパだけが…

続けて「兵役を強制された時、さて人として、クリスチャンとして此れは本当に必要な事か？ 自問した：どう考えても答えはノー！」「もし独りなら？ 或いは其の儘何処かに行つて了う事も有り得ただろう、しかし家族が有り人質をとられて居るも同様、もう他の選択肢は無かった。」「そんな訳で、全く意に沿わない経歴、が加わつた訳さ「軍楽隊長」って。「レハーベルもそうでしたね、フリッツチャイも。2人共に洪軍？ レベル高いなあ」「さて軍隊で一つだけ為になつた事。職務上信号ラッパを自在に吹けるようになり素人のラッパ手に教えなきやならんかつたけれど。此れがナテュラルトラムペットに近い、ごく原始的な楽器でね、

其の経歴は後に管弦楽を書くようになって生きて…」（以下次々号）



イラスト・秦阜梅林

クリームソーダ

あきの素生

(くうねるめがね)



こたつを出した。数年前、こたつ無しで冬を乗り切ろうとがんばったが、結局一月末に音を上げて、こたつにすがりついた。それから、寒さの前では無力であると自覚して、こたつに甘え放題甘えている。にしても、今年は例年になく早くこたつを出した気がする。残暑が長引いたので、寒さがいつそう堪えるのかもしれない。

夏の暑さが尾を引いていた九月の終わり、またぞろ海を見に行った。風の強い日に見た東浜の海は、白い波が次々と立ち上がり、切れ間なく浜辺に寄せてきていた。緑がかった青い海と真つ白な波が、クリームソーダみたいだな、と思った。

クリームソーダが好きだった。父の勤め先近くの喫茶店で食べた(飲んだ?)のが、よっぽどうれしかったんだろうと思う。往年のロックスターの愛称に似たそのお店の名前を連呼して、泣きながら地団駄踏んだ記憶がある。どうしてもクリームソーダが食べたくて。ロックス

ターのフアンのものでまねではぐらかされて、連れて行ってはもらえなかったが。

メロンソーダの緑、アイスクリームの白、さくらんぼの赤。今でも喫茶店で見かけると食べたくなるし、実際に頼んだりする。炭酸のジュースの中では、断然コーラが好きなのだが、コーラフロートよりクリームソーダを選ぶ。ソフトクリームがのっているものもあるが、アイスクリームが好み。アイスクリームの周りが、少しシャリシャリしているのがいい。あのシャリシャリが、クリームソーダの肝だと思う。

子どもの頃、家族旅行で愛媛県に行った。家の車で、フェリーに乗って。瀬戸内の海で泳ぎ、民宿に泊まった記憶がある。一泊で帰る予定だったのが、せっかく四国に来たのだからぐりと一周してしまおう、という父の一声で、高知県に向かうことになった。とりあえずの目的地は桂浜。今ならわかる。結構遠くて、結構時間がかかるということが。そんなこととはつゆ知らず、私と弟は旅行が続くとたはしやいだ。

途中で立ち寄るところがわからなかったのか、時間が惜しいと思ったのか、午後三時を過ぎて桂浜にたどり着くまで、お昼ご飯にありつけなかった。当初のはしやぎ

ぶりと打って変わって、空腹と初の長距離ドライブによるくたびれでぐでぐでになった私たちきょうだいは、引きずられるようにして海沿いのレストランに入り、生まれて初めて太平洋を見た。途方もなく大きく、波が荒くて、白く泡立っている。そのときの感想が、クリームソーダみたい、だった。お腹が空きすぎていたのか。あの喫茶店のクリームソーダを思い出していたに違いない。わくわくするような、無計画なドライブ旅行の中で、この太平洋との邂逅がひととき強く印象に残っている。

それからいぶん経ち、就職活動をするようになった頃、高速バスで大阪に行った。慣れないリクルートスーツ、慣れないパンプスで、慣れない高層ビルの中、慣れない会話をする。そんなにくさんのことをしたわけでもないのに、ひどく疲れた。帰りのバスの中では爆睡して、休憩で寄ったパーキングエリアでは、乗降口からきれいに落ちた。スーツのタイトスカートは思ったより足が開かず、そのまま前向きに倒れてしまったのだ。もぞもぞと起きて、バッグの中身を拾った。後ろから降りてきたほかの乗客のみなさんは、見ないふりをしてくれたり、心配して声をかけてくれたり、どちらもありがたかった。幸いだったのは、痛みより恥ずかしさより眠気が勝っていたこと。おかげでもうろうとしたまま何事もなかったようにバスに戻り、また爆睡しながら帰った。何が言いたいかって、それほど疲れていたということなのだが、高速バスに乗る前、予定していた就活を終えて、どこかでひと息付きたいと、座れるお店を探した。どこも混みあっている中、やっと空いた席を見つけ、腰を落ち着けたところでメニューに目をやると、クリームソーダがあった。スーツ姿でクリームソーダなんて、と考えもしたが、芳しくない就活の手応えを、クリームソーダで忘れて励まされたかった。もちろん、クリームソーダを注文した。クリームソーダって好物があつてよかったね、とあんなの自分に思う。何かあるたび、好きなものにさやかながら支えられている。バスからは落ちたけれども。



(イラスト あきの素生)

拾うひと その二



ドラメリア (座敷わらし)

実家の別宅に猫が実つてもうすぐわが家の一員になりそうだと書いたのはほんの二号前だというのに、何とということだろう。彼らはまた猫を迎えたいらしい。しかも子猫だと聞く。数時間おきにミルクをあげないといけない、まだ目の青いとびきり小さな子猫。送られる写真の数々からは可愛さがあふれ出ている。何を撮影しても奇跡的に不細工に撮れてしまうため「不細工カメラマン」と家族から呼ばれていた母は、突然才能が開花したのか(あるいは才能が枯渇したのか)称号を捨てて、愛くるしい写真を毎日のように送りつけてくる。

名前は、神無月にやって来たから、カンナ。一年前の五月に迎えたトラ猫は、さつき。ではこれが十二月ならシワスなのか、それはさすがに反対したい。とは言うものの実家で最初に飼った猫はその名も「おたふく」だったので、父親の命名センスに比べたら月の法則に則った

方がいくらかましかもしれない。

さて、このカンナ。実は前回書いた長毛種の猫の子どもだと言う。兄弟の多くは父親方の向かいの米屋に引き取られ、カンナだけが別宅の主人である父の手に委ねられた。

一方、当の母猫はといえば。子猫たちの将来を考えてか彼らを養子に出すことには抵抗しなかったものの、自分では人間の庇護下に置かれることをよしとしなかったようだ。食糧事情が改善してふさふさと美しい毛並みになった彼女は、野生の貴婦人として、悠々と、自由に、別宅で生きているという。故に、名前はなし。



・編集後記:

今年の秋は、日赤前のぎんなんが拾われずにと残っています。コロナで銀杏拾いも自粛でしょうか。茶碗蒸しに入れても、そのままレンジで加熱しても美味しいのに。

ドラメリア (編集長)

最近、イノベーション・ジレンマという言葉を知りました。小商い十年説、個性には賞味期限がある、と自覚しますが、このジレンマは自分の得意分野が間に合わなくなりじやまをするという摂理。変化は大事ですね。奈良敏行(発行人)